

葛飾区史編さんだより Vol.18

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 27 年 3 月 7 日（土）午前 10 時から、青戸地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。

多くの方にご参加いただき、青戸にまつわる様々なお話を伺うことが出来ました。



中川の河岸

昭和初期まで中川は東京からの物資を運ぶ船が通るルートでした。大量の物資を運ぶためには車よりも船という時代でした。

船で運ばれた物資のひとつに人糞尿がありました。これは田畑の肥料に使われました。青戸七丁目に「紺屋の河岸」と呼ばれる船着き場がありました。そこまでは下肥の桶 600 本分を積載できる大きな船に載せて、そこから先は小さな「ハシケ船」に積み替えて運びました。後述する植木鉢（今戸焼）の材料となる青戸の土も、このように浅草の今戸へ運搬しました。

また、このあたりは鯉釣りの名所として知られ、東京の都心部からも大勢の釣り客がやって来ました。釣り好きの人々からは「青戸の鯉は口が肥えているから練りエサには舟和の芋ようかんがいい」などと言われていました。

高砂橋では灯籠流しが行われることがあって大勢の人が詰めかけました。戦時中は水練所が設けられ、海軍に召集された人で泳ぎが苦手な人に水泳を教える場所になっていました。

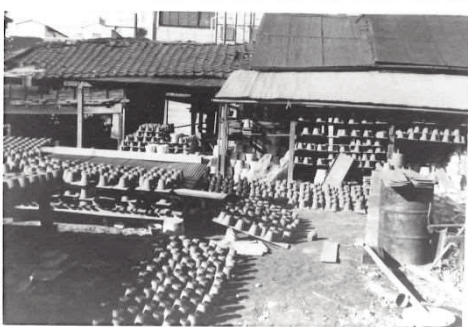
延命寺の大祭

青戸の古刹延命寺は 4 月 15 日前後に大祭があります。この催しは現在も行われていますが、昭和 20 年代はいっそう盛大に行われていました。青戸の人々にとっては一年でもっとも大きなイベントでした。また、青戸だけでなく、近隣の集落の人々も参拝に来ました。遠くは板橋区などからも講中を組んで参拝する人がありました。

現在も続いている植木市ですが、昭和 20 年代は境内を埋め尽くすような植木の露天商が川口市などから詰めかけ、芋の苗ものなどを販売していました。「厄神様（延命寺）で買った芋苗は良く当たる」という評判で農家の人々も買い求めていきました。

午後から夜にかけて青戸の人々はミカンと箆を持って、日暮里の松本源之助の神楽や舎人（足立区）の「かんちゃん一座」の芝居の見物に行きました。大祭の日の午後、亀青小学校では「青戸の子は帰っていいぞ」と先生から許しが出て、延命寺の祭りを楽しみました。

また、前年の大祭から翌年の大祭までの間に青戸にお嫁に来た女性は、嫁入りの支度をして、姑に連れられて大祭の人ごみのなかを延命寺にお参りに行く習わしがありました。青戸の人々にとって、延命寺は宗教宗派を超えた信仰の対象となっていたようです。



慈恵医大病院

現在の「慈恵医大葛飾医療センター」はかつて、「大島病院中川診療所」、ついで「東京慈恵医大中川堤診療所」という結核専門の病院でした。昭和 20 年代まで、結核は国を挙げて克服を目指していた国民病です。死に至ることもある恐ろしい伝染病だったので、専門の病棟で治療されていました。

昭和 25 年、ストレプトマイシンが普及すると治癒率が劇的に向上しましたが、それまでは「あそこの病院は毎日霊柩車が入り出している」とか「土手の方から病室を覗くと患者がさみしそうな顔をしながら手を振る」などと言う人もいたそうです。

現在は、東京東部屈指の近代的設備を備えた総合病院として、多くの外来患者と 356 床のベッドで入院患者を受け入れ、地域住民の健康を守っています。

西青戸・表青戸の生業

昭和 20 年代まで、青砥駅から 100 メートルも離れると農地が広がっていました。青戸の農村地帯は、現在の青戸七丁目、八丁目を中心とする西青戸と、現在の六丁目を中心とする表青戸に分かれます。

これらの地域では農業が盛んでしたが、特色として、西青戸のしめ飾り作り、表青戸の漬け菜作りがあります。いずれも暮れの仕事で、東京都心の町家では正月になくてはならないものでした。

しめ飾りは 12 月になると西青戸の家で競って作られ、浅草や芝、神田、愛宕の歳の市に出荷されました。大正以前は農家が各自でリヤカーや大八車で出荷したものでしたが、その後は「トロヤ」と呼ばれる仲買人が買い受けるようになりました。

このほか、花を栽培して都心に出荷したり、植木鉢（今戸焼）を作ったりする家が数軒ありました。今戸焼は、大正 12 年の関東大震災を契機にその窯場を今戸から葛飾区を中心とした地域に移転して操業を始めたという経緯があります。青戸の土は蓮根栽培だけでなく、植木鉢など素焼きの焼き物にも最適でした。これが少し離れたお花茶屋駅の近くの土を使うと「ガチが入る」といって砂の混ざる土になり、焼成すると植木鉢の表面に傷が生じます。蓮根も荒れたものしかできなくなります。植木鉢を作る家は、農家から水田の土を購入し、一日数百個の植木鉢を販売していました。

青砥駅の周辺

昭和 12 年の地形図を見ると青砥駅周辺の市街地は駅の西に向かって開けていたことがわかります。現在の京成バスの亀有―新小岩線が通っている道路の方へ向かうには、南か北へ 200 メートルほど前後に歩き、踏切を越えなければなりません。

駅前周辺には、篤志家が提供した土地に駅舎と広場があり賑わっていました。やがてバスのロータリーが出来るといった話もあり、京成上野線と押上線の分岐点として将来にわたる発展が期待されていました。

駅近くには、「ハッピー（理髪店）」や「パレス（カフェー）」、「大黒寿司」、ビリヤード場、宿泊施設などもありました。この宿泊施設は、当時、1 円均一の料金で東京などの大都市を走った「円タク」というタクシーがあったことから、それを模して「円宿（えんしゅく）」と呼ばれていたそうです。